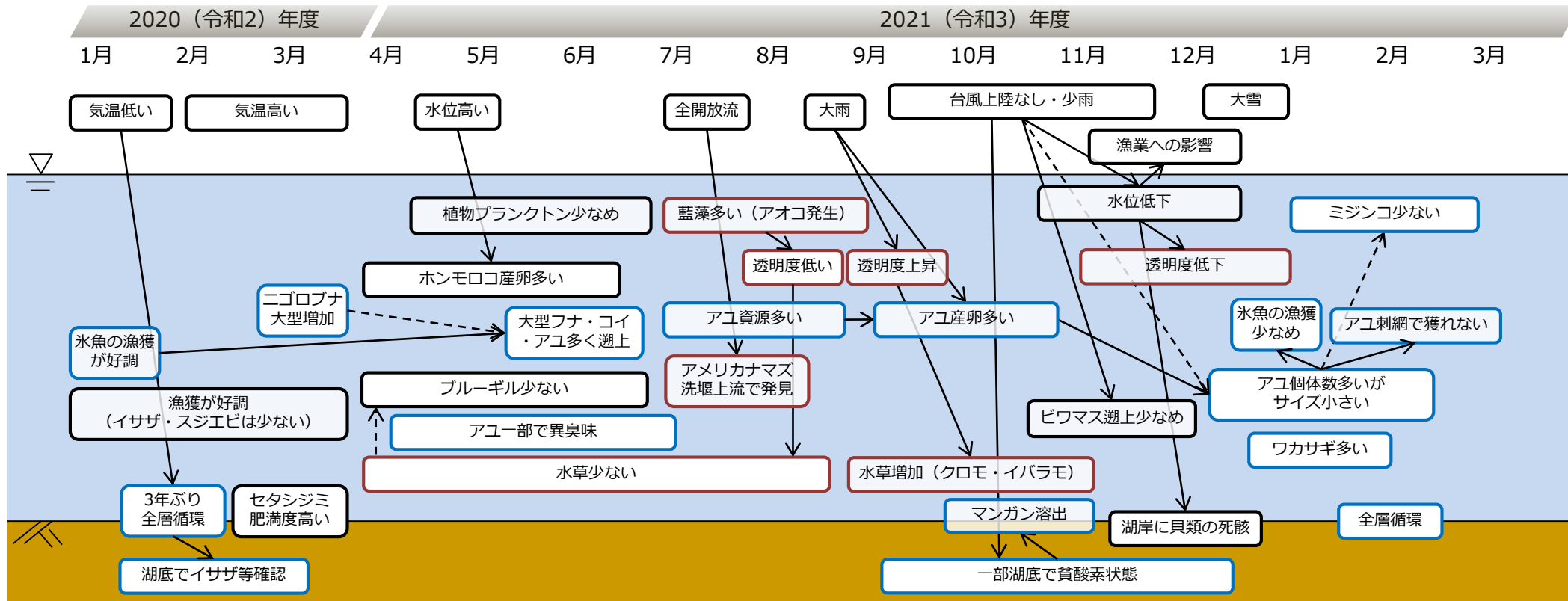
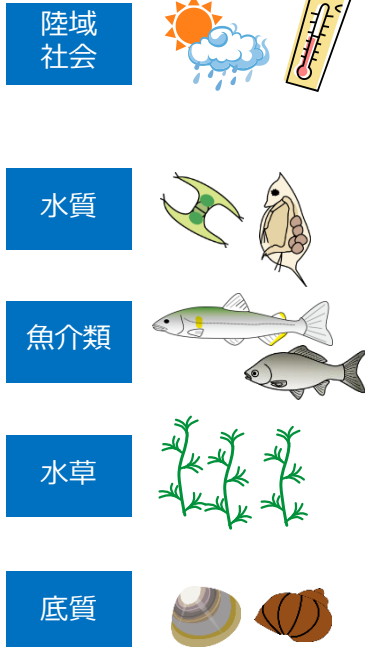


凡例： 北湖・南湖の現象 北湖の現象 南湖の現象
 → 因果関係がある可能性が高い
 -?-> 因果関係ははっきりしないが可能性が疑われる

資料4



※この模式図は、琵琶湖の状況について関係者の意見等を整理したものであり、各事象間の関係性について科学的に実証されたものではありません。

滋賀県では、琵琶湖の生態系のバランスを是正し、本来の在来魚介類のにぎわいを復活させるため、行政、事業者の枠をこえた「魚たちのにぎわいを協働で復活させるプロジェクト」チームを結成し、琵琶湖で生じた現象の把握や課題の整理を行っています。本チームで議論した内容を踏まえ、令和3年度に琵琶湖で生じた事象間の関係性を時系列に沿ってまとめました。なお、このまとめは学術的な検証を得ていない結果を含んでいるにご注意ください。

令和3年度はいくつかの極端な気象現象が生じ、琵琶湖の生態系にも影響を与えました。南湖では7～8月に藍藻類の増加が見られ、透明度の低い状況が続いていましたが、8月中旬の大雨により透明度が上昇し、その後のクロモ等の水草の増加に寄与しました。また、河川の水量が増加したことから、アユの産卵も早期に活発となり、確認された産卵数は平年の2倍以上になりました。10～11月の記録的な少雨により、琵琶湖水位が-69cmまで下がり、漁船の操業等に影響が出たほか、一部の湖岸では貝類の死骸が多く見られました。南湖では底泥の巻き上げや植物プランクトンの増殖により、透明度が低下しました。一部河川では、瀬切れなどの影響で、産卵のため河川を遡上するピワマスにも影響が出ました。また12月は彦根で観測史上1位の降雪があり、その融雪水が底層に入り込む事象も確認されました。

北湖では令和2年2月に3年ぶり全層循環が確認されたのち、底層では溶存酸素濃度（底層DO）が概ね平年並の値で推移しましたが、9～12月にかけて台風の上陸がなかったことも影響して、一部湖底で多くの生物の生息環境に悪影響を与える2mg/Lを下回りました。北湖の表層水質については、近年頻発している大型藻類の大発生はなく、水質は平年並となりました。全窒素は環境基準をわずかに達成しませんでした。大きく悪化したものではありませんでした。

魚介類については、年間を通じてアユの資源量が豊富で、8月の大雨の影響もあり、アユの産卵が活発になりました。一方でその後、稚魚の数が多すぎて餌が競合したこと、秋に雨が少なく栄養不足から餌が少なかったことが影響して、サイズが小さく、氷魚の漁獲等に一部影響が出ました。そのほか、7～10年前に生まれたと見られる大型のニゴロブナが増加している（大きすぎて鮎寿司には向かない）ことや、春にアユの一部で異臭味が出ること、ブルーギルが少ないこと、ホンモロコの産卵が多く見られることなどがありました。



資源が豊富だったアユ（6月）



透明度の低い南湖湖岸（8月上旬）



豪雨後の湖岸（8月中旬）



湖岸に堆積した巻貝の死骸（11月）